

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0823 ◆◆◆

25/01/15

【今年ドル/円も大相場を期待、「ドル安」方向を見込む】

当レターで何度もレポートしたように、ドル/円は昨年まで3年連続で年間変動幅が20円超え。過去の平均変動幅が18.4円であることからすると、大相場がまだ継続していると言ってよい。またこちらも既報済みだが、昨年はザックリ「141円→162円→139円→158円」と、過去例に見ないほど大きな上下動だった。さて、そうした状況を踏まえつつ、今回の当レターでは新春恒例である「年間変動率」を参考にしたドル/円相場の今年一年の見通しについて報じてみたい。期待としては4年連続の大相場、「年間変動20円超」を今年も予想しているのだが果たして如何に。

◎予想レンジは「142-164円」、一時的な高値更新を否定できないが…

当レターでは過去に幾度となくレポートしている「年間変動率」だが、改めて最初に簡単な説明を試みたい。過去の相場変動をデータ化したもので、ドル/円の平均変動幅は18.5円、同率もほぼ同じ数字の18.5%程度となる。

一方、今年の為替市場の寄り付き価格は、筆者が参考になっているデータで157.25円。これを基準価格とし、今年も平均で先に挙げた18.5円、あるいは18.5%の価格変動が予想されることになるわけだ。

そして、今年のオープンレート157.25円に後者のデータ平均変動率である18.5%を単純に掛け合わせてみると、仮に一年を通して一本調子のドル高が進行した場合の高値メドはなんと180円台。逆に一本調子にドル安が進んだとすれば安値は130円割れとなる。なかなかイメージしにくいドル高もしくはドル安レベルへの進行も、計算上は否定できないと言えよう。

ー ー 上記したものは通常のオーソドックスな分析になるが、ここからが過去にもレポートしているオリジナルな「斎藤流」の年間変動率だ。いま一步踏み込んでさらに詳細な見通しを考えてみたい。

過去の変動率のデータを、最初に(1)「ドル強気相場」と(2)「ドル最強相場」、(3)「ドル弱気相場」と(4)「ドル最弱相場」、(5)「中立相場」ー という5段階に分類してみる。紙幅の関係もあり、上記5例の算出方法や詳細な分類については省くけれども、それからすると(1)の「ドル強気相場」の年は年初寄り付きを基準に平均でドル高方向におよそ14%、ドル安方向に同じく5%ほど動くことが判っている。同様に以下で、(2)から(5)について算出した過去の平均変動幅をもとに、今年のドル/円相場のドル高値と安値を予想してみた。以下がそれになる。(基準レートは157.25円を使用)

(1):「ドル強気相場」;ドル高方向に14%、ドル安方向に5% ー ドル高値179.27円、ドル安値149.39円
(2):「ドル最強相場」;ドル高方向に17%、ドル安方向に2% ー ドル高値183.98円、ドル安値154.11円
(3):「ドル弱気相場」;ドル高方向に6%、ドル安方向に12% ー ドル高値166.69円、ドル安値138.38円
(4):「ドル最弱相場」;ドル高方向に3%、ドル安方向に16% ー ドル高値161.97円、ドル安値132.09円
(5):「ドル中立相場」;ドル高方向に9%、ドル安方向に9% ー ドル高値171.40円、ドル安値143.10円

お気づきのように、飽くまで年間変動率の観点からすると、今年一年間でドル/円相場は「30円近い」の変動をたどっても決して不思議はないようだ。前段で筆者が予想した「年間変動20円超」などは、大相場どころかむしろ「控え目な見通し」とさえ言えるかもしれない。

2018-20年に観測された「年間変動率が10%」程度というオワコン状態から完全に抜け出し、潮の目が変わった2022年以降のドル/円大相場は、基本的に今年も続く公算が大きいと考えている。さすがに「年間変動30円」動くか否かは筆者も若干懐疑的。とは言え、それでも詳細は後述するように「年間変動20円超」という変動は今年も堅いのではなかろうか。

なお、改めてレポートするまでもないが、外資系金融機関など幾つかのレポートをみたり、テレビの経済番組における識者のコメントを聞いたりする限り、一般的には今年の年間予想として「ドル安・円高」方向を見込む向きが多い気がしないではない。

事実、14日のブルームバーグは「ウォール街、トランプ次期大統領の就任にらみドル高進行を予想」ー などといったタイトルの記事を配信。内容的にも「ゴールドマン・サックス・グループとTDセキリティーズ、ドイツ銀行など大手銀行の為替ストラテジストらは今年のさらなるドル高進行を予想」と指摘していた。

しかしながら、昨年 12 月 19 日付けなど何度かレポートする機会があったので、覚えている方もいると思うが筆者は逆に「ドル弱気から最弱」を見込んでいる。一般的な見通しとほぼ正反対の見通しと言ってもよい。

なぜそうなるのか。理由についても、すでに手垢がつくほど何度もレポートしているので、ごく簡単にとどめるが、一言でいえば「今年は政治相場になることを予想している」ため。そして、そんな政治相場のカギを握るトランプ新米大統領(来週 20 日に正式誕生)は、明らかに「ドル安・円高」を望んでいることによる。1985 年のプラザ合意はさすがに言い過ぎだが、ここしばらく観測されてこなかった「政治の介入」により相場はドル安方向へと振れる可能性がかなり高いと予想している。

いずれにしても、そうした相場観をもとにした具体的なレンジ見通しはというと、先で指摘した「ドル弱気相場」をもとに、「年間変動 20 円超」を考慮したうえの結果として、ザックリ「142-164 円」。比較的早いタイミングで 160 円台乗せ、昨年高値 161.96 円を超えていく展開も否定できないものの、そののち一転してドル安が進行。年間を通して言えば、逆にドルはほぼ冴えない値動きをたどるようなイメージを抱いている。相場格言の「人の行く裏に道あり花の山」一を敢えて狙っているわけではないけれども、おそらく少数派に分類される筆者の年間予想が、結果としての的中すればこれほど嬉しいことはない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

